

国語〔問題〕

(100点・70分)

注 意 事 項

1. 試験開始の合図があるまで、この問題冊子の中を見たり、裏返したりしてはいけません。
2. この問題冊子は26ページあり、解答用紙は1枚です。
試験中に問題冊子・解答用紙の印刷不鮮明、ページの落丁などに気付いた場合は、手を挙げて監督者に知らせなさい。
3. 試験開始後、ただちに解答用紙の所定記入欄に、氏名・受験番号・誕生日をそれぞれ正しく記入し、さらに受験番号・誕生日をその下のマーク欄にマークしなさい。
4. 受験番号・誕生日が正しくマークされていない場合は、採点できないことがあります。
5. 解答は、解答用紙の解答欄に各設問で指示された方法で記入しなさい。
マーク方式は、例えば、

20

と表示のある問いに対して②と解答する場合は、次の(例)のように解答番号20の解答欄の②にマークしなさい。

(例)

解答番号	解 答 欄
20	① ● ③ ④

6. 問題冊子の余白等は、下書きなどに適宜利用してよいが、各設問で指示された解答は、必ず解答用紙の解答欄に指示された方法で記入しなさい。
7. この時間は「数学」または「国語」の選択科目となります。メディア情報学部情報システム学科を受験する場合は必ず「数学」を選択して解答しなさい。
8. 試験終了後、提出は解答用紙のみとし、問題冊子は持ち帰りなさい。

第一問

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

暴力は国家にとって最大の権力手段である。「国家」という言葉が抽象的すぎるなら「政府」といってもいいだろう。

国家は法律を定め、その法律に違反する行為を取り締まる。その違法行為の取り締まりにおいて手段となるのが、強制捜査、逮捕、^aコウ禁、処罰といった実力行使、すなわち暴力である。

(中略)

近代国家の成立によって暴力行使をめぐる社会的環境は大きく変化した。もっとも大きな変化は、公権力によって暴力行使が原則禁止（つまり違法化）されるようになったことだ。

では、何が近代国家の成立をもたらしたのか。トマス・ホッブズを^{こうし}嚆矢とする近代的な社会契約説はそれを説明しようとした。

¹社会契約説はまず自然状態を想定する。自然状態とはホッブズがそれを「各人の各人に対する戦争」と描写するように、各人の暴力行使を禁止するような公権力が存在しない、もしくは公権力自体は存在していてもそのようなものとしては機能していない状態のことだ。

人びとの暴力行使を禁止し、そのことによって人びとに安全を保障するような共通権力がどのように成立したのかについて、ホッブズは「各人对各人の信約によって」であると述べている。すなわち、各人は暴力を勝手にもちいないことを互いに信約（契約）し、また、みずからの力を特定の人間もしくは合議体に委ね、平和と安全にかなする事柄についてはその人間もしくは合議体の意志にみずからの意志を従わせることを互いに信約（契約）する、こうした手続きによって共通権力が打ち立てられた、ということである。

社会契約説はこのように、近代国家を成立させたのは人びとの意志的な契約だと説明する。

しかし、社会契約説には決定的な弱点がある。それは、なぜ近代になってはじめて国家——合法的な暴力行使の源泉と

なるような国家——が成立したのかを説明できない、という弱点だ。

もし意志的に人びとが契約をして共通権力を打ち立てたのなら、近代以前の時代にも現代のような国家が存在してもよかつたはずだ。しかし現実の歴史はそうではなかつた。なぜ近代なのか、という時期の問題を、人間の意志に根拠をもとめる社会契約説は説明できないのである。

この時期の問題はとても重要だ。なぜならそれを説明することこそが結局は近代国家の成立のメカニズムを説明することになるからである。

ここでは、²ノルベルト・エリアスの議論を参照しよう。彼は『文明化の過程』のなかで、貨幣経済の発達と火器の発達という二つの要因が近代国家の成立をもたらしたと論じている。

ということか。

まず、貨幣経済の発達は、都市とそのあいだの交易路を押さえていた王に富を集中させると同時に、臣下への俸禄^{ほうろく}を土地の分与から貨幣による俸給に変えた。貨幣経済との結びつきを強めた王は、その富によって火器を調達し軍事力を増強していくとともに、動員した兵士たちには土地ではなく貨幣を俸給として与えたのである。

この時代、土地とは自給自足を可能にする最大の経済基盤であつた。つまり土地を分与された戦士貴族たちはそれだけ政治的にも経済的にも自立した存在となる。³土地の分与とは——たとえそれが名目上は上級の領主からの土地の委託管理にすぎなかつたとしても——分権化をうながすモーターにはかならない。貨幣経済はその分権化のベクトルを逆向きに、すなわち集権化のベクトルに変えたのである。

また、火器（銃）の発達は兵力のあり方を根本的に変えた。それまでは鎧^{よろい}をまとつて馬に乗つた重騎兵部隊が兵力の中心だつた。重騎兵たちは、みずからの武術と馬術という個人的な技量にもとづいて戦うため、王⁴に対しても部隊に対しても相対的に自立的な存在となる。これに対し火器の発達は、重騎兵部隊による個々人のパフォーマンスよりも、火器をもつた歩兵部隊の組織力のほうを有利にした。その結果、火器を調達し歩兵部隊を組織する王の力の優位性が高まる。火

器の発達、王に軍事力が集中することを可能にし、同時に重騎兵である戦士貴族たちの自立性を奪っていったのである。

A

このようにして集権化された力こそが近代国家を成立させる基盤となったとエリ阿斯は論じている。その集権化された力によって、国王は封建諸侯たる戦士貴族たちの自立性を制限していったからである。

自立性を制限する、とは、他者たちの自由な暴力行使を制限・禁止することでみずからの決定が貫徹される領域を広げる、ということにほかならない。その結果、合法的な暴力行使の源泉が国王のもとに一元化されていく。集権化と暴力行使の制限・禁止は、まさに近代国家の成立の過程で並行して進んでいったのである。

それでは、以上のような近代国家成立のプロセスは私たちに何を示唆しているだろうか。

まずいえるのは、近代国家が成立したのは人びとが〈暴力への自由〉をみずから放棄したからではない、ということだ。そうではなく、まず人びとに暴力行使を禁止することができるだけの力を集中させた統治権力ができて、

B

近代国家は成立した。力の布置の変化がまずあって、それが人びとの行動様式に変更を迫ったのである。

社会契約説は人びとが自然状態から脱するために自然権（つまり自己の裁量で暴力を行使する権利）を自発的に放棄したと説明する。しかし自発的に自然権が放棄されるなどということはありえない。自然権の放棄によって共通権力が打ち立てられたのではない。逆に、共通権力をなりたたせる力の集中があったからこそ、自然権が否応なく制限されていったのである。

じつは、この点にかんしてはホッブズも、人びとが自発的に信約（契約）を結んだのとは異なる社会契約のモデルを考えている。つまり、強者が内側もしくは外側からあらわれてきて無理やり暴力行使の禁止を人びとに迫ることで共通権力が打ち立てられる、というモデルだ。それをホッブズは「獲得によるコモンウェルス」と呼ぶ。これに対し、人びとが自発的に信約をするモデルは「設立によるコモンウェルス」と呼ばれる。

二つのモデルのうち、歴史的な現実に即しているのはもちろん **C** のほうだ。ホッブズ自身こう述べている。
「あるコモンウェルスのはじまりが、良心において正当化されうることは、 **D** 」、と。

もう一つ、近代国家成立のプロセスから導きだされる重要な論点がある。それは、私たちは自由意志によって近代国家を設立したのではない、という論点だ。

人間の意志ではなく、軍事技術の発達や貨幣経済の発達という物質的な環境の変化こそが近代国家をもたらしした。^(注1) ハイデガー的でない方をすれば、まさにテクネーの変容が暴力の体制を根本的に組み替えたのである。あるいはマルクス主義的な語彙をつかうなら、下部構造の変化こそが上部構造を変えた、ということになるだろう。

このことは暴力と道德の関係を考えるうえで、けっして見落としてはならない認識を提供する。

私たちは通常、両者の関係を考えるさい、道德を基盤にして暴力を論じようとする。たとえば「なぜ人を殺してはいけないのか」という問題にはちゃんと道德的な理由がある（はず）だと考えるように。あるいは、犯罪を減らすには道德的な教育をもっとすべきだと多くの人が考えるように。つまり、道德のあり方が暴力のあり方を左右すると、一般には考えられているのである。

しかし、近代国家成立のプロセスを考察することで理解されるのは、それとは逆の関係である。すなわち暴力の体制こそが道德を左右する。暴力をめぐる社会的環境を変化させた力の布置のあり方こそが、私たちの行為規範を規定するのである。

私たちは、暴力はよくないと考えたから、それを禁止するような国家体制を構築したのではない。力の布置の変化によって自力救済が制限されるようになったからこそ、私たちは利益獲得や他者との葛トウ^bの解決のために暴力をもちいることはよくないと考えるようになったのである。まさに **E** のあり方が **F** のあり方を規定するのである。 **G** の体制に先立って **H** があるのではない。

エリアスは先の『文明化の過程』のなかで、近代をつうじていかにヨーロッパの人びとが暴力をもちいなくなったのか、

そのプロセスとメカニズムを分析している。その暴力減少の最大の要因の一つが近代国家の成立だ。その成立をつうじて、暴力を勝手にもちいることが統治権力によって禁止されるようになった。そのため、人びとは暴力以外の方法で経済的利益を獲得しようとしたり他者との葛トウを解決したりするようになったのである。

ヨーロッパ社会の文明化がこうして始まる。人びとのふるまいは必然的にセン^c練されていき、怒りをあらわにすることや、ソ^d野な言動自体も人びとにイ^eミ嫌われるようになっていった。たとえば「唾を吐く」という行為は、かつてのヨーロッパでは当然のふるまいであったが、近代をつうじてじょじょになされなくなっていく。ちょうど社会の前面から暴力がしりぞき、人びとの身体が非暴力化していくこととパラレルに、だ。

つまり、「暴力はよくない」という道徳を人びとが自明なものとして受け入れるには、そもそもその前提として暴力が人びとからイミ嫌われるものになっていなくてはならないのである。

(菅野稔人『暴力と富と資本主義』による)

注1 ハイデガー……マルティン・ハイデガー（一八八九―一九七六）は、二十世紀ドイツの哲学者。

注2 テクネー……ハイデガーの用語であり、「技術」もしくは「技術知」を意味する。

注3 マルクス……カール・マルクス（一八一八―一八八三）は、十九世紀のプロイセン王国時代のドイツの哲学者および経済学者。

問一

線部 a ～ e のカタカナと同じ漢字を用いるものを、各群の①～④のうちからそれぞれ一つずつ選びなさい。

解答番号は a

1 · b 2 · c 3 · d 4 · e 5

a コウ禁

① 彼女はコウテイ的な返事を出してくれた。

② 先住民達は厳しくテイコウした。

③ 危険を感じて必死にアラガった。

④ 彼は細かいことにはコダワらない性格だ。

b 葛トウ

① フジの花の見ごろはいつだろうか。

② 創業者の方針を新社長もトウシュウしている。

③ 戦士はいつでもタタカえるように準備しなければならない。

④ これは毎日の現金管理が簡単に行えるスイトウ帳です。

c セン練

① 私は目を閉じて口をトガらせた。

② 私は十五歳の時に牧師からセンレイを受けた。

③ 干した根をセンじて飲む。

④ このチームは非常に高いセンモンセイを持った人達で構成される。

d ソノ野

① この本は数学的ソノウが無ければ、まったく理解できるものではない。

② ソノダイごみを捨てるときは注意が必要だ。

③ 日本人は欧米から学んだ知識をソノシヤクして、自らのものにして、さらに発展させたと考えられている。

④ 若い人はカソセイに富んでおり、粘土のように様々な形になり得る可能性を持っている。

e イミ嫌われる

① 彼女は正直にイトを話してくれなかった。

② 社長は、金のイリヨクでまわりの人たちを動かそうとしている。

③ 彼女の意見は私の意見とコトなる。

④ キンキを破ってしまえば、大変なことになる。

問二

——線部1「社会契約説はまず自然状態を想定する」とあるが、この「自然状態」の説明として適切でないものを、次の①～⑤のうちから一つ選びなさい。解答番号は 6。

① 「自然状態」とは、各人の暴力行使を制限する共通権力が存在する以前の状態である。

② 「自然状態」とは、「なぜ人を殺してはいけないのか」という問いに先立つ、戦争の状態である。

③ 「自然状態」とは、コモンウェルスが成立する以前のものです、個々人は国家の助けなしにお互いのことを理解しあわなければならない状態である。

④ 「自然状態」とは、コモンウェルスが成立する以前のもので、個々人は暴力行使の自然権が制限されていない状態である。

⑤ 「自然状態」とは、公権力が存在しているとしても、公権力として機能していない状態である。

問三

——線部2「ノルベルト・エリアスの議論を参照しよう」とあるが、本文におけるエリアスの議論の位置付けとして最も適切なものを、次の①～⑤のうちから一つ選びなさい。解答番号は 7。

- ① ホッブズによる社会契約説の弱点を示すために参照している。
- ② どのようなメカニズムによって意志的契約が成立したのか考察するために参照している。
- ③ 近代国家成立の矛盾点を考慮するために参照している。
- ④ なぜ近代になってはじめて国家が成立したのか考察するために参照している。
- ⑤ ホッブズによる社会契約説を逆説的に支持する論点を提示するために参照している。

問四

——線部3「土地の分与とは——たとえそれが名目上は上級の領主からの土地の委託管理にすぎなかったとしても——分権化をうながすモーターにはかならない」とあるが、どういうことか。その説明として最も適切なものを、次の①～⑤のうちから一つ選びなさい。解答番号は 8。

- ① 土地の分与は、王からの経済的自立を促進する。
- ② 土地の分与は、暴力への自由をいっそう制限する。
- ③ 土地の分与は、貨幣経済の発達を促進する。
- ④ 土地の分与は、共通権力への志向をいっそう強める。
- ⑤ 土地の分与は、合議体成立の基盤となる。

問五

——線部4「王に対しても部隊に対しても相対的に自立的な存在」とあるが、どういうことか。その説明として最も適切なものを、次の①～⑤のうちから一つ選びなさい。解答番号は 9。

- ① 相対的ではあるが、装備の軽重にかかわらず戦うことができる存在。
- ② 自己の裁量で王に従うか部隊に従うか決定できる存在。
- ③ 暴力行使ができる範囲を自由自在に決めることができる存在。
- ④ いかなることに縛られず、暴力を用いて自由に振る舞うことができる存在。
- ⑤ 自己の裁量で暴力の行使をある程度決定できる存在。

問六 空欄

A

10。

に入る最も適切なものを、次の①～⑤のうちから一つ選びなさい。解答番号は

① 要するに、貨幣経済の発達も火器の発達も、それまでの集権的な封建社会のあり方を転換し、王からの分権化をもたらしたのである。それは一方で軍事的には集権化することで、封土として分割されていた土地を一つの領土（国土）として統合していくような経済的な集権化でもあった。

② 要するに、貨幣経済の発達も火器の発達も、それまでの集権的な封建社会のあり方を転換し、王からの分権化をもたらしたのである。それは軍事的に分権化したがゆえに、封土としての土地が一つの領土（国土）として統合される一方で、経済的には分権化がもたらされたと言えるのである。

③ 要するに、貨幣経済の発達も火器の発達も、それまでの分権的な封建社会のあり方を転換し、王への集権化をもたらしたのである。それは軍事的な集権化であると同時に、封土として分割されていた土地を一つの領土（国土）として統合していくような経済的な集権化でもあった。

④ 要するに、貨幣経済の発達も火器の発達も、それまでの分権的な封建社会のあり方を転換し、王への集権化をもたらしたのである。それは軍事的な分権化であると同時に、一つの封土を分割し、多様な領土（国土）を構築、拡大していくような経済的な集権化でもあった。

⑤ 要するに、貨幣経済の発達も火器の発達も、それまでの分権的な封建社会のあり方を転換し、王への集権化をもたらしたのである。それは封土として分割されていた土地を一つの領土（国土）として統合することにより、軍事的、経済的集権化のベクトルを逆向きに変えたとも言えるのである。

問七

空欄

B

に入る最も適切なものを、次の①～⑤のうちから一つ選びなさい。解答番号は

11。

- ① その統治権力が強制的に暴力行使を禁止することで
- ② その統治権力から強制的に暴力行使の権限を奪い取ることで
- ③ その統治権力が徐々に暴力から遠ざかることで
- ④ その統治権力が徐々に個々人の自立性を高めることで
- ⑤ その統治権力が合法的暴力を強制的に制限すること

問八

空欄

C

、空欄

D

に入る語句の最も適切な組み合わせを、次の①～⑥のうちから一つ選びなさい。

い。解答番号は 12。

- ① C 「設立によるコモンウェルス」 — D 世界にめつたにないのである。
- ② C 「設立によるコモンウェルス」 — D 世界的に認められていることなのである。
- ③ C 「設立によるコモンウェルス」 — D 世界によく見られることなのである。
- ④ C 「獲得によるコモンウェルス」 — D 世界によく見られることなのである。
- ⑤ C 「獲得によるコモンウェルス」 — D 世界にめつたにないのである。
- ⑥ C 「獲得によるコモンウェルス」 — D 世界的に認められていることなのである。

問九 空欄 E、空欄 F、空欄 G、空欄 H に入る語の最も適切な組み合わせを、次の①～⑤のうちか

ら一つ選びなさい。解答番号は 13。

①	E	道徳		F	暴力		G	暴力		H	道徳
②	E	暴力		F	葛トウ		G	道徳		H	葛トウ
③	E	暴力		F	道徳		G	暴力		H	道徳
④	E	道徳		F	暴力		G	道徳		H	暴力
⑤	E	暴力		F	道徳		G	道徳		H	暴力

問十 本文の内容と合致しているものを、次の①～⑦のうちから二つ選びなさい。解答番号は、二つのうち数の小さいものが14、数の大きいものが15。

- ① 暴力に対する嫌悪は、道徳が基盤となって生まれたものではなく、合法的暴力が国家によって独占されという社会環境が準備されることによって生まれたのである。
- ② 社会契約説では、貨幣経済の発達と集権化により、人びとは共通権力を打ち立てるための信約を結んだとしている。
- ③ 近代国家が成立した一つの要因として、火器の発達がある。これにより、戦争において組織力が重視されるようになり、個人の自立性は制限されていた。
- ④ 王に富が集中したのは、火器の発達に伴って人々の自由な暴力行使を王が制限したことによるというよりはむしろ、貨幣経済の発達による分権化のメカニズムが大きな役割を果たした。
- ⑤ 合法的な暴力行使の源泉が国王のもとに一元化されることは、近代国家を成立させる上で不可欠であったが、自然権が意的に放棄されていたプロセスも見過ごすことはできない。
- ⑥ 人びとは自然状態を脱するために、王に富を集中させ、近代国家成立を果たしたが、自発的に暴力への自由を手放したわけではない。
- ⑦ 近代国家の成立には、人びとの意志が不可欠であるが、力の布置の変化が人間の行動様式に変容をもたらしたのである。

第二問

次の文章は、社会学者の大澤真幸による講義の記録である。これを読んで、後の問いに答えなさい。

これからレヴィ・ストロース構造主義への批判をとりあげます。

具体的には、フランスの哲学者ジャック・デリダ (Jacques Derrida, 一九三〇—二〇〇四) によるレヴィ・ストロース批判をとりあげます。

デリダはまずこう指摘しました。「構造」には必ず「中心」がある、と。構造主義はさまざまな構造を扱ってきました。親族システムの構造であるとか、神話に隠れている無意識の思考のパターンとか、です。

重要なのは、思考の構造、つまり意味を担った記号の集合からなる構造です。その場合は、中心とは何か。ここで、重要な注釈をつけておかなければなりません。いま、思考の構造と言いましたが、それは、要するに象徴(記号)のシステムとしての言語のことです。言語こそが構造の中の構造、構造の原点です。というのも、それは当然のことで、構造主義というのは言語学の応用、言語学の拡張として始まったからです。

言語のシステムの要素は一つずつの言語記号です。言語記号は、「意味するもの(音声)」と「意味されるもの(意味)」の二面で成り立っている。この二面については、構造主義の源泉であり、この二面性を指摘した言語学者フェルディナン・ド・ソシュール (Ferdinand de Saussure, 一八五七—一九一三) に敬意を払ってなのか、それぞれフランス語で「シニフィアン(意味するもの)」と「シニフィエ(意味されるもの)」と呼ばれることが多い。

言語を構成する言語記号は、すべてが対等なわけではない。そのなかに、I 的な記号、他の言語記号がまさにそれとの関係で意味をもちうるような「中心」として機能する記号がある。デリダはそうように主張するわけです。その「中心」となる記号のことを、「ゼロ記号」などと呼ぶわけですが、それは何なのか。¹

どのようにイメージすればよいのか。ひとつの例を出してみます。ある時代や、ある状況の中にある人々を強烈に惹きつけてしまうスローガンとして働く記号がありますね。そういう記号に関する例です。若松孝二監督が撮った『実録・連

合赤軍 あさま山荘へのドウテイ^a』という映画がありました。一九七二年のあさま山荘事件へと向かっていく連合赤軍のことをドキュメンタリータッチでまことに **Ⅱ** 的に描いた、三時間以上の長い映画です。

この映画を見ると、連合赤軍に参加するような、当時の左翼^{注3}の若者たちにとつて、「共産主義」がいかに重要な言葉であつたのか、がわかってきます。彼らは何をするにも、何を言うにも、共産主義との関係を問題にする。「共産主義の地平では……」が彼らの口癖です。「地平^b」という表現も実に当時の雰囲気をよく表しているわけですが、「共産主義の地平では」というのは、共産主義というタイギを前提にして考えたときにはどういう意味をもつのか、という趣旨です。

たとえばこんな場面があります。彼らは、山岳ベースで革命のための訓練をしています。外から見ていると戦争ごっこようですが、彼らはそれなりに本気だし、冬であつたことを思えばたいへんながまん強さでもあります。そんな山岳ベースには、お風呂がない。ドラム缶を風呂代わりに使っているわけですが、そんなものでは満足できないので、あるとき数名が抜け駆けして、街に出て、銭湯に行った。小ざっぱりして帰ってくると、小屋で待っていた他の者たちが彼らを激しく批判した。本当は羨ましかつただけだと思ふのですが、こんなとき、「共産主義の地平では」がもち出される。共産主義という観点から、銭湯行きが是か非か、問われるわけです。あるいは警察と対峙し、銃撃戦をしながらあさま山荘に閉じ籠もっているときに、一人がビスケットをつまみ食いました。すると、残り少ない食料を勝手に食べるとはけしからん、ということが、またしても「共産主義の地平」で問われる。

このケースでは、「共産主義」こそが、構造の中心に置かれた **I** 的な記号です。ここで重要なことは、よく目を凝らして状況を見ると、「共産主義」とは何か、はつきりと定義できる人はひとりもいなかった、ということです。誰ひとりとして、「共産主義」が何を意味しているのか、明晰^{めいせき}には言えなかったのです。つまり「共産主義」は、「シニフィエなきシニフィアン」であり、「ゼロ記号」です。

このケースで「共産主義」が意味をもたない空虚なシニフィアンだからといって、嘲笑してはいけません。なぜなら、まさにこのゼロ記号があるおかげで、連合赤軍の人々の言語に意味が宿り、その言語が彼らの行動を強く規定したからです。

たとえば、女性メンバーの一人が軽く化粧していたり、指輪をしていたりしていた。このことは、あの銭湯のときと同じように、他のメンバーに軽い嫉妬や羨望の気持ちを起こさせるでしょう。それ自体は、どこにでもある平凡な出来事です。が、この種のこと^cが、やがて仲間を何人もシユクセイするような過激なリンチへと至²つてしま²う。どうしてかくも過激化する²のか、といえば、「共産主義の地平」でそれが問題にされているからです。

この種の記号を、デリダを含む何人かの論者は「ゼロ記号」と呼ぶ。さらに厳密なことを述べておけば、実は、レヴィ・ストロース自身にも、「シニフィエなきシニフィアン」に対応する概念がなかったわけではありません。レヴィ・ストロースはそれを「浮遊するシニフィアン」と呼びました。

Ⅲ

的な意味に結びつかずに、浮動していくシニフィアンがある、と。ただ、レヴィ・ストロースは、デリダのように、それ³に構造形成にかかわる重要な意義を認めるまでには至りませんでした。

デリダによれば、ゼロ記号^dがフカされることで、構造がまさに構造として成立する。連合赤軍の例では、「共産主義」というシニフィアン⁴が加わらなければ、彼らの過酷な戦争⁴ごっこは何のためのものか、まったく定まらない。ゼロ記号とは、いわば「画竜点睛」です。これが加わったことによって、構造の中の要素のすべての意味が決定される。このフカのことを、デリダの用語で「シュプレマン (supplément)」(英語だと「サプリメント」と呼びます。日本語では、なぜか知りませんが「代補」と訳されることが多い)。

デリダが、レヴィ・ストロースの構造主義をどのように批判したかを理解するには、もう少しデリダの議論を追いかけてはなりません。デリダは、いま述べたように、構造形成のメカニズムを考えてきたわけです。ゼロ記号の代補によってそれが可能になっていた、と。このことを、彼は、今度は、西洋の形而上学^{けいじじょうがく}の理解に応用した。「西洋の形而上学^{注4}」というのは、ソクラテス^{注5}・プラトン以来の西洋哲学のすべてのことだと考えてかまいません。西洋形而上学もまた、ひとつの構造としての閉鎖性や統一性をもっているのだとすれば、それは、何かの代補によって成り立っているはず⁵です。代補しているものは何か。「ロゴス (理性)」です。デリダは、西洋形而上学に、ロゴス中心主義を見たわけです。

が、ここまでであれば、たいしたことはありません。デリダでなくても言いそうなことだし、言ってきたことです。デリダの独創は、さらにこれを「声」と関係づけたことです。ロゴスの真理をタンポしているのは「声」である、と。したがって、西洋形而上学のロゴス中心主義は音声中心主義でもある。

声の中心性とは、こういうことです。理性は、しばしば、声、内面の声のようなものによって表象される。その場合、「声」というのは、たまたま選ばれた比喻ではなく、ロゴス（理性）にとって、本質的な隠喩、他のものには代えられない必然的な隠喩になっているというわけです。

どうして、声でなくてはならないのか。なぜ声が特別なのか。声においては、話すことと聞くことが一致しているからです。いま、私は話していますが、それがそのまま聞こえています。声においては、話すことと聞くこととの間に隙間がありません。⁵ どうして、このことがそれほど重要なのか。噛み砕いて説明します。

普通、私は、私の内面の真実、つまり私の意図や欲望を表現するために話します。つまり、私は、私についての真実を言語のような記号に置き換える。この内面の真実が、その記号の「シニフィエ」です。しかし、記号が私の外に出て、私にとって疎遠なところに置かれたとたんに、それは他者のさまざまな解釈にさらされ、誤解されたり、曲解されたりする。もはや、その記号から本来のシニフィエが再現されなくなります。

しかし、私が自ら話しているのを聞いているときには、そのようなズレは生じようがない。私が聞いているそのシニフィアンとしての声は、私の内面にあるシニフィエ——私のまさに言わんとしていること——そのものだからです。少し難しい言い方を使えば、声は、自己の自己に対する現前を保証しているのです。これを「現前の形而上学」などと呼びます。

ここからデリダは翻って、レヴィ・ストロースの構造分析にも、音声中心主義があると看破する。構造主義に音声中心主義が入るのは、仕方がないところがあります。なぜなら、「構造」は、もともと、言語学のとりわけ音韻論から来ているからです。音韻というのは、意味の弁別に利いている最小の言語単位です。意味の弁別に役立たなければ、

IV 的

な音声としては違いがあっても、音韻としては同じものと見なされます。音韻の分布は、独特の構造をもつ。それが、しばしばレヴィ・ストロースの構造主義に应用されました。だから「構造」が音声中心主義になることは不可避です。

デリダは、音声中心主義を批判する。どうして「批判」になるのかというと、もちろん、デリダが、構造の中心には「声」がある、というのは誤りであり、一種の幻想だと考えているからです。自己の自己への現前を保証する声、つまりシニフィアンにびったりと本来のシニフィエ（私が言わんとしていること）が結びついている状態、これが構造の中心にある。⁶これは、形而上学であり、かんたんに言えば思い込みである、というわけです。

このことは、もう一度、ゼロ記号について論じたことを思い起こすとすぐにわかります。ゼロ記号は（ここに述べてきたような意味での）「声」なのか。全然違います。たとえば、「共産主義」は、連合赤軍にとってゼロ記号になっていた、と解説しました。「共産主義」というシニフィアンは、充実した、真正のシニフィエと結びついているのか。そうではなかった。「共産主義の地平では」と叫んでいるとき、語っている主体は、自分でも何を語っているのかわかっていないのですから。しかし、このシニフィエの不確定、あるいはシニフィエの不在こそが、「共産主義」がゼロ記号として機能するための条件でした。

ゼロ記号は、主体の内面を正確に表現し、現前させている……どこではありません。どの主体も、ゼロ記号からは疎外されていて、自分の「内面」の状態とは対応しない。だからこそ、ゼロ記号はゼロ記号として働き、主体たちの言動を規定していた、と考えなくてはならない。

「音声」に対して、デリダが対置するのは、「エクリチュール (écriture, 文字)」です。エクリチュールの方が、音声よりも本源的である、と。

音声の場合、聞かれることと話すことの間の距離が近い——ついには無になろうとしている——ということを特徴としている、と話しました。文字は逆です。文字は、書いた主体から離れ、独立しようとする。主体不在であっても、それは残ります。「文字」という概念は、主体というものがもつ、本来的な疎外のようなものを指し示すために、用いられてい

るのです。つまり、主体は、「自分が言いたいこと」にびつたりと一致した記号を操るのではなく、逆に、「自分の言いたいこと」とか「内面」とかとは無関係なもの、何やら他者的なもの（一人歩きして連合赤軍のメンバーを呪縛したゼロ記号のことを思い起こしてください）にこそ支配されてしまう。これが、主体の本来的な疎外ということです。

構造主義は、実のところ、実存主義的な主体を相対化し、主体が無意識の構造に規定されている、ということを証明しようとした。しかし、デリダの厳しい目から見ると、それはなお、音声中心主義の圏内にある。つまり、それはなお、「主体から疎外されていない記号」という夢のようなものの中にある、というわけです。

（大澤真幸『社会学史』による）

注1 レヴィ・ストロース……一九〇八―二〇〇九。フランスの文化人類学者。構造主義を提唱した。

注2 連合赤軍……一九七一年に共産主義者同盟赤軍派と日本共産党革命左派京浜安保共闘が合体して成立した、過激派武装闘争組織。あさま山荘事件を起こした。

注3 左翼……急進主義的な傾向をもつ思想や運動。また、そのような思想を持つ人や団体。

注4 ソクラテス……古代ギリシアの哲学者。「無知の知」を説いた。

注5 プラトン……ソクラテスの弟子。「イデア論」で知られる哲学者。

問一

線部 a ～ e と同じ漢字を用いるものを、各群の ① ～ ⑤ のうちからそれぞれ一つずつ選びなさい。解答番号は

a 16 ・ b 17 ・ c 18 ・ d 19 ・ e 20。

a ドウテイ

- ① ヴァイオリンのオンテイが狂っている。
- ② 土地を借金のテイトウに入れた。
- ③ レポートのテイサイを整える。
- ④ 拙著をゾウテイする。
- ⑤ ザンテイ的に社長の案を選択した。

b タイギ

- ① 危機的状况にあってもタイゼンとしている。
- ② 自分はタイキバンセイだと信じている。
- ③ タイボウの子どもが生まれた。
- ④ 被災地はジョウタイに復さないまだ。
- ⑤ コアラなどのユウタイ類は南半球に多く生息する。

c シュクセイ

- ① 多数の聴衆を前にしてイシュクする。
- ② 結婚のシュクエンが華やかに催された。
- ③ シュクボウを遂げた顔は晴れ晴れとしていた。
- ④ ゲンシュクな雰囲気場を支配した。
- ⑤ パーティには紳士シュクジヨが参集した。

d
フカ

① 奇妙な噂がルフしている。

② 川の水面のフリユウブツを取り除く。

③ 議案の審議を委員会にフタクする。

④ 家族は互いにフジョし合うことが大事だ。

⑤ フシヨウブシヨウ仕事に取りかかる。

e
タンボ

① タンネンな職人仕事に感心する。

② 彼は物事にタンパクな性分だ。

③ その事件が一連の騒動のタンシヨとなった。

④ 危機に直面してもひるまないタンリヨクが必要だ。

⑤ 負傷者をタンカで運ぶ。

問二

空欄

I

・ II

・ III

・ IV

つ選びなさい。二つある I には同一の語が入る。なお、同じものが二度入ることはない。解答番号は I 21

II 22

・ III

23

・ IV

24

① 一義

② 特権

③ 迫真

④ 物理

問三

——線部1「それは何なのか」の答えとして適切でないものを、次の①～⑤のうちから一つ選びなさい。解答番号は **25**。

- ① その記号との関係によって、他の記号が意味をもちうるような記号。
- ② ある状況やある時代の人々を惹きつけてやまないスローガンとなるような記号。
- ③ 思考の構造において中心に置かれる記号。
- ④ 難解な記号であるため明確な定義が難しい記号。
- ⑤ 「意味されるもの（意味）」が存在しない記号。

問四

——線部2「どうしても過激化するのか」とあるが、その理由として最も適切なものを、次の①～⑤のうちから一つ選びなさい。解答番号は **26**。

- ① 彼らは革命のための訓練をしているのであって、それを怠けるような態度は許されないから。
- ② 彼らは共産主義の地平を実現することを標榜^{ひょうぼう}しており、人と違うことをするのは許されないから。
- ③ 山荘に閉じ籠もっている彼らにとって、食料や化粧品、装飾品は貴重であつたから。
- ④ 共産主義という名目のもとでは、何でも社会で共有することが絶対的ルールであつたから。
- ⑤ 彼らにとって共産主義の意味は規定されていなかったため、かえって些細^{ささい}な逸脱も許されないという思いに支配されたから。

問五 — 線部3 「構造形成にかかわる重要な意義を認める」とあるが、どういうことか。その説明として最も適切なものを、次の①～⑤のうちから一つ選びなさい。 解答番号は 27。

- ① レヴィ＝ストロースが、デリダのように、言語を構造の中の構造とし、言語学を応用して構造を分析したこと。
- ② レヴィ＝ストロースが、シニフィアンとシニフィエをソシユールに従って区分し、シニフィエが社会や時代によつて変化することを発見したこと。

- ③ 明確な指示対象の存在しないシニフィアンが構造を構造として成立させる機能を持つことを、デリダが見いだしたこと。

- ④ 「共産主義」というシニフィアンに対応するシニフィエを、デリダが明らかにしたこと。

- ⑤ 「共産主義」という記号をデリダは「ゼロ記号」と呼び、連合赤軍の人々の過激化を食い止めたこと。

問六 — 線部4 「画竜点睛」とは、どのようなことをたとえた故事成語か。その説明として最も適切なものを、次の①～⑤のうちから一つ選びなさい。 解答番号は 28。

- ① ①～⑤のうちから一つ選びなさい。 解答番号は 28。
- ② わずかなことで全体が引き立ってくること。

- ③ 心が明らかに澄んでいて、静かに落ち着いていること。

- ④ 自然の道理に従い、私心を捨て去ること。

- ⑤ 細かい点にまで気を配ること。

- ⑥ 一つの態度や原理で、始めから終わりまで貫くこと。

問七 — 線部5「どうして、このことがそれほど重要なのか」とあるが、その理由として最も適切なものを、次の①

⑤のうちから一つ選びなさい。解答番号は 29。

- ① 書くことではなく話すことでのみ、話し手自身の意図や内面がそのまま聞き手に伝わると考えられるから。
- ② 話し手がシニフィアンを声に出すことで、聞き手はシニフィアンをそのまま受け取れると思われるから。
- ③ 音声中心主義者にとって、理性は声以外には表象され得ないものであるから。
- ④ 話し手にとって、自らの声が意味しているものは、自身の内面そのものであると考えられるから。
- ⑤ 話し手と聞き手との内面の間にズレがないと感じられるから。

問八 — 線部6「これは、形而上学であり、かんたんに言えば思い込みである」の説明として最も適切なものを、次の

①⑤のうちから一つ選びなさい。解答番号は 30。

- ① 西洋の形而上学は、ロゴス中心主義であり、理性で考えたにすぎないものであるということ。
- ② 話し手が自らの声によって自分の言いたいことを正しく直接的に表すということは、実際には起こり得ないということ。
- ③ 構造が音声中心主義になるのは、言語学のとりわけ音韻論から来ているため不可避であるということ。
- ④ ソクラテスは文字を残さず自らは声のみで思想を伝えているので、形而上学は音声を中心とした学問であるということ。
- ⑤ 音声による「現前の形而上学」ゆえに、話し手の声と内面との間に隙間はないということ。

問九 ―線部7『主体から疎外されていない記号』という夢のようなもの』として適切でないものを、次の①～⑤

のうちから一つ選びなさい。解答番号は **31**。

- ① 聞き手の誤解を招くことなく話し手についての真実を示した記号。
- ② 自己の現前を話し手自身に対して保証している音声。
- ③ シニフィエが不確定または不在であるゼロ記号。
- ④ 話し手の意図と完全に一致した記号。
- ⑤ 主体の内面の状態と対応したシニフィアン。

問十 問題文の趣旨として最も適切なものを、次の①～⑤のうちから一つ選びなさい。解答番号は **32**。

- ① 連合赤軍の若者たちにとって「共産主義」というゼロ記号は、自分たちの運動を過激化させるまでに支配的なものであり、またそこでは声への信頼から、文字ではなく声によって革命を起こそうとした。
- ② デリダは、レヴィ・ストロースの構造主義に対して、構造を形成するゼロ記号の重要性を見落としている点を批判し、声におけるシニフィアンとシニフィエの一致を認める音声中心主義が幻想にすぎないことを指摘した。
- ③ 言語システムの要素である一つずつの言語記号は、声に出され音韻によって意味づけられ、それを発する主体の内面を表現することで、主体たちの言動を規定する。
- ④ レヴィ・ストロースは、音声においてシニフィアンとシニフィエとの距離を近づけ、無にしようとした。デリダは文字によって記号を独立させ、主体を疎外しようとした。
- ⑤ ゼロ記号の代補によって構造のすべての要素の意味が決定されることから、形而上学における理性の代補は、それを表象する内面の声が不可欠であり、幻想的なものといえる。